

山とスキー

第八十八號



札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和三年十二月廿八日印刷開始

昭和三年十二月一日發行(每月一回)

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號八十八第

.....

記 事

北海道日高山脈の圈谷狀溪谷

山口 健 兒 (一)

樺太東海岸樫保山の植物

平 塚 直 秀 (九)

憶出深かりしヒユツテン・レーベン(四)

島 田 昌 一 (三)

—ホルメンコーレン五十籽大長距離競走—

ロツグケビン及びカッターヂ

其の建築法造作飾付及び家具の造方

廣 田 戸 七 郎 (二六)

雜 錄

寫 眞 版

五〇籽途中のラツバライネン選手。
今冬招かれんとする選手達。

(二六)

昭和三年十二月發行



50°K.M. 途中のラツバライネン選手

北海道日高山脈の圈谷狀溪谷

山 口 健 兒

私は日高山脈中の山々を多く知つてゐるのではない。併し北海道に於ける登山の興味は今や大雪山、夕張岳等を含む中央高地より次第に日高山脈の山々に向ひつゝあることは争はれない。中央高地の殆んどは登攀しつくされて来た今日に於てはやむを得ないことであらうと思はれるが、日高山脈は又中央高地とは別個の著しい存在として、登頂の有無に關せざる奥深い興味を吾々に與へて呉れるのである。

その成因より見ても中央高地は石狩山脈（石狩岳より三國山に至るもの）を除いてはすべて火山の集群より出来上つてゐるのに反し、日高山脈は古生層の岩石より成り、中央高地とは又別の風趣を表してゐるのである。

既に火山形成の山容と、古生層より成る山容との間に於て差異を認められるばかりでなく、緯度から見ても日高山脈は中央高地より南に位する故に、降雪量にも相違があり、唯見たゞけでも風景に著しい變り方を見ることが出来るが、殊に日高山脈に於て目につくもの立派な圈谷狀溪谷であらう。

されば中央高地には圈谷狀溪谷は絶無であるかと云ふに決してさうではない。例へば小泉秀雄氏は大雪山山臺中に又忠別岳附近にその存在を指摘されてゐるが、日高山脈に於ける程顯著ではないのである。

日高群峯の比較的よく眺望出来て、更に手近な山である札内岳（或はピリカベタン岳とも云ふ。アイヌはピリカベタン

岳なる名稱を用ひてゐる)の頂上に立ちて日高の山々を見渡すときには、丁度吾々が越中藥師岳、黒岳(水晶岳)或は立山を遠望するときに見る如き山脈に數多くのカールを見るのである。

札内岳より見て顯著に見ゆるものだけ舉げては戸蔦別岳(陸地測量部圖幅の戸蔦別岳は美生岳、その南方の一九六〇米の峰を戸蔦別岳とアイヌは稱呼す)より幌尻岳へ續く連峯、エサオマントツタベツ岳(陸地測量部圖幅札内岳に於て札内岳西方の一九〇一米を云ふ)及びそれより南方に續く多くの山に數多く美事な圍谷狀溪谷を數えることが出来る。尙この尾根の續いて札内岳とは札内川を隔てた對岸の一九七九・四米の標高を示す日高南方の最高峯附近には一層多く認めることが出来る。これらはすべて北面、又は東面の山腹に現れてゐる。

一瞥しただけでも斯くも多くの圍谷狀溪谷を見出し得られるのである。今これらの中で私がよく見た一九七九米の嶺のカールについてその状態を述ぶるにあたり圍谷即ちカールなるものの成因を淺識ながら記述したいと思ふ。

圍谷は即ちカール (Karl) 又は Kane, Karr) なる奥國ババリア地方の通用語の和譯である。地學上はカールなる語の他にサーカス (Cirque) なる英語をも用ふるがカールなる名稱が一般に通用されて居る。又地方によりては色々或はボト (Boin) 又はケツセル (Kjessel) スカンデナビヤ地方) と云はれ、佛語ではシルク (Cirque) 獨逸ではシルカス (Cirrus) 又はカアシ (Karsen) とも呼ばれ、同じ英國でもスコットランドではコーリー (Corrie) 又は Corry) ウェールスではクウ (Cwm) となる名稱を持つてゐると云ふことである。

日本にても圍谷の他に扇狀溪谷、碗狀溪谷とも呼ばれてゐる。即ちその形狀が扇を開いた様であり、又茶碗を二つに割つた様な形であるからである。外國に於てもその形が羅馬時代圓形劇場の構造に似てゐると云ふので Amphitheatre なる名さへつけられてゐると云ふことである。又日本で俗にマヤとも呼ばれてゐる。

このカールの成因についてはまだ一定した説はないやうであるが、一般には氷雪の削磨作用に依つて作られたものであると云ふことは信ぜられて居る。外國の例に見れば大抵は氷河の作用であるが、日本の如く既往に於て尙氷河の存在の疑

はれてゐる所ではまだ明白な説明は困難であらうが、或は現在のカール状地形は過去に於けるカールに依つて作られたものであるとか、或は高山の頂上附近に於ては、雪に覆はれてゐる時期が長いと、溪水の少いために比較的侵蝕されるものが少くて下方の溪流は水量が多いために大いに侵蝕される。かゝるときに山は益々急峻となつて、遂に上方の急斜面が安定を欠くために、上部の雪が安定な位置まで迂り下り、この雪の營力によりてカール状の地形を作り出すものであるとも云はれてゐる。

兎に角、日本に於けるカールの成因については多くの専門學者の中に於ても大いに論議され、確定的の説明がないのであるから勿論我々如きにはこれ以上知ることが出来ないが、その形状は前述の如く茶碗を二つに割つた如く、側面は雪に削りとられて半圓に近く急斜面をなし、底部は三方より雪崩れ落ちる雪の連ぶ岩石の堆積の外、溜つた雪は除々にとけるために激しい剝磨作用を受けぬために緩斜面、或は平面となり、甚しくは沼の様な水溜りをさへ作り、この底部でとけた水は細流となつて流下してゐるものである。又この細流と本流と合するとき本流は水量多きため水蝕甚だしけれども雪は除々にとけるため、この細流と本流との合流は著しく段が付き、細流は斷崖を流下して本流と合するが如き有様となることがある。かゝるものを「吊り懸け谷」と呼ばれてゐる。

私は日高山脈中にある多くのカール状溪谷を云々することは決して出来ないが、今年の夏この山脈中の一九七九・四米の無名峰の登山に於て見たカール状溪谷の美しさを思出して簡単に記録して見たいと思ふ。

私達は一行四名と、人夫として芽室のアイヌ水本春吉を連れて戸蔭別川を溯り、途中よりピリベタヌ澤に入つて札内岳（ピリカベタヌ岳とも）へ登り、一路札内川へ下つたのである。アイヌの水本は十三の時からこの附近の山へ這入つたと云ふ。今五十有餘の脊の低い男ではあるがアイヌ特有の美鬚を豊かにたくはへて、チロロ川だけは困るかと云つて重い荷を平氣で春負つてついて來たのである。

この登山に於てはこの一九七九・四米の峰が何と云つても一番我々の興味を惹いてゐたことは事實であるが、考へて見

ると、随分大事をとつたものであつた。もつとも次の川下りの行程上の都合からでもあつたが、この山へ登る前日は札内本流と、この峰へ入る支流の合流に午前中に着いたのであるが、そのまゝ天幕を張り皖つりなどをして暖かい日ざしの下で休養してしまつたのである。

明れば七月十四日天氣は既に一週間に近く續く晴明なものである。荷物は皆天幕に置いて唯、ザイル、クランボン、食料品その他手まわりの物だけを持つて午前五時廿五分に出發した。

この澤の河床は平らで、兩岸は川楊が繁茂し、身輕の一行の歩みは早い。卅分程行くとあたりは巨岩の壘積となり、その間を碧い水が奔つて、その彼方には一九七九米の峰の續きが、そのカール狀溪谷に雪を飾つて現れて来る。この澤の兩岸は廣くひらけ木立も少く明るい谷である。尙ゆけば左岸には雪の押し出して來たものとも思える土砂が圓丘狀をなして盛れ上り、柔かさうな草ばかり一面に生えてゐるのをすぎれば、目指す山の頂も見え、その東方に走る尾根の北面には美事なカール狀溪谷が二つ並んで、尙多くの雪を載せて陽光に輝いてゐる。そのカール狀溪谷の下は裸の岩が絶壁となり我々の澤へ幾狀もの瀧を落してゐるのが見える。

又頂上より北に續く尾根の東面にも一個雪に白いカールが稍々形小さく見える。口にうまく云えぬ位の雄大にして美しい眺めである。尙行けば澤に残雪多くなると共に左側は高い斷崖の連續となり、白煙を擧げながら水には見えぬ細條が落下して来る。これをすぎると谷は幅廣く一面の雪に覆はれ、大きな裂目がその下に躍る奔流をのぞかせる。この雪溪は暫くにしてS字形をなし三方高い崖にとりまかれて、丁度穴の底の様になり急に澤の形がなくなつてしまひ、幾條もの長い瀧があらからちからも躍り下つて挿鉢の周圍から落下する水が一旦底に集り、一方をつき破つて流れ出て澤となつてゐる様な地形を現出した場所へ出てしまふ。この急な崖を登らなくては、何れへも行かれない所へ出てしまふのである。幾條もの瀧の落下してゐる左側の崖の上は急に平らとなり前に望みせる二つ並んだカールへ出るものの様に見うけられる。此處までは本流との合流よりつい先に興味を惹かれたため休みなしで一氣に一時間と若干にて着いてしまつた。

この澤は水量も多く谷も廣いので可成りの前途を期待してゐたのに急に谷は舌頭狀に斷崖の下でなくなつてしまつたのは少からず驚いた様な次第であつた。

此處の雪溪の中央に露出した岩の上に廿分程休んで後、水本が頂上三角櫓の材木を運んだ時に登つたと云ふ正面の一九七九米の北方の鞍部へとりつく澤へ出るために（この澤は瀧となつて落ちてゐる）根曲り笹の密生した間の雨水にえぐれたくほみをたよりに急な斜面を登つた。これは正面の瀧のすぐ左方である。暫くゆくと頼みのくほみもなくなり、急斜面の笹の中を笹に釣り下つて、上へ漸くにして出るには出たが幾分は樂であらうと思つた澤は急であり、雪溪にはなつてゐるが所々落ちて斷續するばかりでなく、その急峻さ及兩岸の矗立さは悉く我々を威嚇してしまつた。

矗立した兩岸の間には眞すぐに四十五度に近い角度をなして眞直ぐに覆ひかぶさる様に遙か上方に續いてゐる雪溪。我々はクランボンをつけて登り始めた。下の方は瀧などのために所々雪が落ちてゐるので一苦勞したが、それも間もなく雪つたひばかりとなる。途中まで登るとその急峻さに下を見ると思はずゾツとすることが何度もあつた。一行中のあまり山に慣れぬN君のためにザイルが役にたつたり、我々としても中々の緊張さを以て一步一步と雪に齧の齒を喰ひ込ませて登つた。

併しここに驚異すべきはアイヌの水本である。彼はカンデキをも用ひずこの急角度を雪面の波狀痕を利用して草鞋の儘で平地の様に登つて行く。常に我々よりは遠く先に出て足場のよい所で待合せてゐてくれる。我々は彼の技術にあきれながらついて登つたのである。

相當長い雪溪であつたがそれも盡きて急峻な草原を滑りながら登る。ヒメシヤクナゲやキンバイなどが一面に生へ熊の糞は此處彼處にゴロゴロしてゐた。肩についたのはもう十時半であつた。この處には小徑らしいものが續いてゐる。水本は熊の通路だと事もなげに云つてゐたが、これは一九七九米の頂上まで續いてゐたから熊の道をそのまま測量の時につかつた残りであらう。

これより頂上までの道はこの上なく氣持よいものであつた。矮小な偃松を踏み分けて行つたり、シヤクナゲ、コケモ、ガンコウランの叢を越えたり、暖かい日光の下をのびやかに、この如何にも高山の頂上部らしい風景を味ひながら登つて行つたのである。

十一時十五分には頂上についた。櫓は倒れてゐるが一等三角點の名に恥ぢぬ雄大な展望に地圖を出すのも忘れて見惚れざるを得なかつた。

日高北方の連山は云ふに及ばず此處からは南方の秀峰が肩を並べて眼底へ押し寄せる。まづ目につくのはイドンナツプ山である。その他は無名峰であるが何れも、強者然として淡靄に一刷毛ほけて、その間々には新冠川（こむかひがわ）、シビチャリ川その他の深い、切れ込みを見せて聳えてゐる。

神威岳は雲にかくれて見えなかつた。十勝の平野はまだ散りやらぬ雲海の底に消えて見るよすがもない。

その次にこの山を粧ふカールをまづ見下した。上から見たカールは唯平面に雪が縦横に走つてゐるだけで美しいものではない。そればかりかあまりに近くのは見當さへつかない様な平凡な斜面となつてしまつてゐる。一九七九米のすぐ東方のカールは大きく、それとはつきり指示することが出来、尙此のカールの底部には水溜りさへ出来てゐる。水本の話に依れば幌尻岳のカール状溪谷のつゞいてゐる底部は沼に富み、何とも云えぬ美しい眺めであると云ふ。

頂上にて晝食後すつかり悠然としてしまひ、眞紅に實つたコケモ、を口が紅く染つた程食べた。かうして人々から隔れた草の上に寝て、何れも遠く美しい山々にとりかこまれ、朗らかに躍る陽光を浴び、谷より山の膚を撫でながら上つて来る風に髪を弄ばせて、やがては自分を微笑ませるであらう想出の豊かになりしを喜ぶ心は遂に自分にだけしか解らないものであらうか。過去も未來もなく現在の單なる一瞬時の零圍氣に心が慌しく伸展してゆくのを感じるばかりである。

我々は降路の相談をしたが誰も今登つた谷を下らうと云ふ者がない。まづ第一は水本にカンヂキがない事である。水本は自分はこの位の所は慣れてゐるから何とも思はぬが、他の人が危いと云ふならやめると、我々が心配する程心配しない

ここに於て我々は頂上の東に北面して並ぶ二つのカール状溪谷を下ることにした。一つは登路の急峻な雪溪を怖れたのではあるが、この谷の様子が著しく我々の心をそよつたのである。頂上發零時卅分。

一路矮性の偃松中をすぐ東方の三角錘狀のピーク目がけて下つて行つた。この尾根と頂上より南方に走る尾根との間にも亦、見事なカール状溪谷が東面して陽に輝き、その下は難しい谷だと云ふコイボクシエシビチャリ川に落ちてゐる。頂上と三角錘狀のピークとの最低部附近は、今まで北側が絶壁をなしてゐたのに反して、草の急斜となり、見事な雪堤さへ出来てゐる。このあたりは、下より見たる二つのカールの中間位に位するのである。雪は多く積んでゐるので冬のスキーを思出しながら一氣にすべり下りてしまひ、カールの底部にあたる禾本科植物の雪に押されて黄色く寝てゐる草地で一休みする。頂上より一時間程で來たのである。

シャウジャウバカマの小さいのが可憐な花をつけて其處此處に見える。我々は水を飲み、堅パンを食してあたりの景色をあかず眺めた。

此處から見るとこの谷は文字通りに茶碗を二つに割つた形をなし、一九七九米の頂上とその東方の三角錘形のピークとの間に丁度大きな棚を釣した様に見える、頂上よりこの底部に至る東面、北面は殊に山骨露出し、茶褐色の屏風を立てた如く思はしめ、この底部で急に平らとなり、一面に岩の細片が擴がつて、そこには二ヶ所程可成りの水溜りを作つてゐる。雪は相當に多く、屏風の三方よりこれに集つて、足を水溜りに入れてゐる。三角錘狀のピークより來るのは、岩があまり出てゐないが、相當急激な傾斜をした草地のまゝ、同じくこれと並びその底からは一條の細流を流してゐる。

このカールの底部よりは、再び急角度をなして谷へ落ちてゐるので、その下の谷は物凄く深く見え、此處から札内岳や南ポロシリ岳（札内岳東方のポロシリ岳を、^{トツメベツ}戸蔭別岳の南方の幌尻岳と區別して斯く云ふ）を眺めるのは、京都の清水寺の舞臺から向ふの山を見る様な感を抱かしめる。

この底部より下方は相當樹木が繁茂してゐるので何とかなると思ひ、三角錘側のカールより出る細流に沿ひて急斜面を

下る。暫く行くと巨岩の壘積となり、急峻の度は小さい飛瀑を懸け、下を覗けば細流はつきたつた一枚岩の面を、白煙となつて落ちてゐる。そこで我々は略々等高線に沿ふて根曲り笹、岳樺、石楠花の類の密生した中をくぐり分けて、今度は一九七九米の方のカールの底部の水溜りより出る細流へ出たが、勿論下れやうとは見えない。尙進んで登つたときの雨水のくほみへ出やうとして再び密生した根曲り笹や、低い岳樺、石楠花を一時間近く捏ねまわして、漸く下へ下れる斜面を見つけて前述の字型雪溪の上部へ出ることが出来た。併し考へるのに、一九七九米の頂上へ出るには登つたときの急峻な雪溪よりも、このコースを登る方が勞力的にも、時間的にもより經濟であらうと思はれる。

この雪溪の真中の土の露出へ再び出て休んだときはもう三時十五分であつた。見上げると、急な黒色の崖を白煙を擧げた水條が、あちらこちらから白龍の様に落下するばかりで、上は澄んだ空ばかり、苦しかつた一日も暮近き雲と共に安息があるばかりである。その時にもつく／＼面白い所を降つたなあと私は心から嬉しかつた。一同も過度の緊張から放たれて唯無心にあたりを見まわしてゐるやうであつた。岩に腰かけて大氣に吹き出す煙草の煙も、心なしかゆるやかに低迷しては溶けてゆく。

そして我々は再び朝通つた路を、そのまゝ軽い即興的氣分に浸りながら、札内川合流の天幕まで戻つて行つたのである。その夜はもう皖にも食べ飽きて、五月蠅いヌカガ、ブヨの類の襲撃に苦しめられながら、疲れた身体は安らかな眠りを中心に慕つたことであらうか。

樺太東海岸樺保山の植物

平塚直秀
島田昌一
照井陸奥生
藤田勝正

邦領南樺太東海岸には二群の火山彙がある。即ち一は突岨山（本誌第七拾七號、平塚直秀「樺太東海岸突岨山の植物」参照）を盟主とする登帆火山彙で、他は即ち樺保火山彙である。

樺保火山彙は樺保川河口の樺保市街の北方に連なつて居る一群の火山で數個の峯に岐れて居るが其内で瀧の澤の北側に聳立して居るものが最高峯とされて居る。（未だ測量不充分で詳しい事不明）私達は樺保を根據として本年八月上旬數日間彼地に滞在し、此の火山彙の代表とも見なし得る瀧の澤北側の一峯に數度登山し、専ら顯花植物採集並びに寄生菌類調査に従事した。以下述ぶるところは其折の備忘録中から書き出したのである。

樺保部落——瀧見橋——樺保瀧

樺保部落を發足し軍用道路（知取、内路を経て國境に到るもの）を東禮文方面へ歩く事約五十分で、瀧の澤に架けられて居る瀧見橋のたもとに出る。即ち此處から瀧の澤を溯るのである。瀧見橋から溪流に沿ふて所々にある石炭の露頭等を眺めながら溯る事約十數分程で樺保瀧がある、瀧は直下約二〇米餘、樺太東海岸では稀に見る壯觀極まりないのである。

瀧見橋から瀧に到る溪流に沿ふ植物景觀は頗る平凡なものであつて、樹木としては、キヌヤナギ、ナガバヤナギ、チガラバナ、ミヤマハンノキ、エゾノダケカンバ、灌木としてはウコンウツギ、エゾイチゴ、マユミ、トガスグリ等で、其他草木としてエゾヨモギ、エゾノタウコギ、ヨブスマサウ、オホタカラカウ、アキノキリンサウ、オホバコ、カラフトハナシノブ、タラチアカバナ、キツリフネ、オニシモツケ、スカシタゴバウ、コンロンサウ、ミヤマオダマキ、サラシナシヤウマ、シラタマサウ、ミヤマタニタデ、エゾイヌタデ、シロイヌタデ、ウラジロタデ、オホバイラクサ、クサヨシ、オホアツガヘリ等が繁茂して居る。

檜保瀧——針葉樹林——ハヒマツ帯

瀧の右側の急斜面を攀ぢ、澤の上部に出ると其處は全く斧の入つた事のない針葉樹林である。樹種の主なものは、トバマツで、所々にエゾマツも見受けられ、其他エゾノダケカンバ、ミヤコハンノキ、ナ、カマド等を見、更に樹林下にはイチキ、ツルツゲ、ニハトコ、エゾイチゴ、マユミ等の灌木、エゾムカシヨモギ、アキノキリンサウ、ハンゴンサウ、エゾムラサキニガナ、ヤノネアザミ、ミ、カウモリ、ヨブスマサウ、コミヤマカタバミ、コンロンサウ、ゴゼンタチバナ、エゾイチヤクサウ、ヤマイチヤクサウ、ウスバサイシン、マヒヅルサウ、ツバメオモト、ミヤマタニタデ、イハノガリヤス、オクヤマシダ、ミヤマワラビ、ヒモカヅラ、ホソバタウゲシバ等を産す。

針葉樹林帯の上部はハヒマツ帯になつて居るが、所々には針葉樹林帯とハヒマツ帯との中間にエゾノダケカンバの純林の存在して居るのを見る事が出来た。

ハヒマツ帯は非常に良好に發達して居て、稀にミヤマハンノキ、エゾノダケカンバ、エゾマツ、トバマツの矮生のもの、ミヤマナ、カマド、オホバスノキ、カラフトイソツ、ジ等を混じ、下草としては、コケモ、リンネサウ、アキノキリンサウ、ゴゼンタチバナ、イハノガリヤス等を産す。ハヒマツ密生林中、所々に見らるゝ岩石露出部にはコケモ、ガンカ

ウラン、チシマギキヤウ、カラフトツメクサ、シコタンサウ、アキノキリンサウ、カハラバウフウ、レブンサイゴ等を見受けた。

檜保山東斜面岩壁

ハヒマツ帯を通過すれば、山頂下の東斜面の岩石裸出部に出る。瀧から約二時半位で此處に達し得られる。此の斜面が本山中最も多くの珍奇な植物を産するところである。斜面の下部に岸石重疊し其岩石上には種々の地衣類がよく發育して居るが、上部は岩壁で數個所に岩隙を有するのみで頂上近くまで殆んど直立して居る。

斜面下部に産するところの植物種類は稀めて少ないが岩壁上には珍奇なもの多く、此の附近の採集には非常に興味を感じた。所産の植物を挙げれば、エゾマツ、トバマツ、リシリビヤクシン、ミヤマハンノキ等ノ極く矮生のものゝ外、ウコンウツギ、ガンカウラン、キンロウバイ、エゾツ、ジ、エゾシモツケ等の灌木、エゾノアヅマギク、スプリボタンボ、アキノキリンサウ、タカラカウ、エゾウスユキサウ、スプリボアザミ、チシマギキヤウ、カラフトヒナギキヤウ、タカネヲミナヘシ、イハブクロ、イブキジヤカウサウ、ミヤマムラサキ、レブンサイゴ、チシマニンジン、カハラバウフウ、クモマワウギ、チシマゲンゲ、ウラジロキンバイ、シコタンサウ、ヤマハナサウ、ホソバノイハベンケイ、カラフトミセバヤ、オクエゾナヅナ、エゾシモツケ、ミヤマヲダマキ、ミヤマハンシヤウヅル、カラフトセンクワサウ、カラフトツメクサ、スプリボツメクサ、カラフトマンテマ、イハウメ、エゾイチヤクサウ、カラフトハナシノブ、カマヤリサウ、ホソバオンタデ、チシマラツキヤウ、チシマゼキシヤウ、タカネヌカボ、リシリカニツリ、ミヤマカウバウ、ヒモカヅラ、リシリシノブ、ニホイシダ等で、此等の内、ウラジロキンバイ、リシリシノブ、クモマワウギ、カラフトヒナギキヤウ（館脇氏新稱）等は未だ今日に到る迄、樺太に於て發見されて居らない種類の様である。

檜保山頂南斜面

東斜面岩壁を左にからんで攀ると頂上の南斜面に出る。此の附近は岩石で被はれて居る急斜面で、斜面は灌の澤に降下して居り、又頂上に近く、エゾノダケカンバの純林をなして居るところがある。此の傾斜地所産の植物を挙げると、オホバスノキ、エゾシモツケ、マルバシモツケ、エゾツ、ジ、コケモ、等の灌木、其他、エゾウスユキサウ、ヌブリボアザミアキノキリンサウ、カラフトバラ、カマヤリサウ、カラフトマンテマ、カハラナデシコ、マヒヅルサウ、クモマワウギ、チシマゲンゲ、チシマフウロ、エゾカンザウ、カラフトサウ、チシマギキヤウ、カラフトヒナギキヤウ、ミヤマオダマキホソバノイハベンケイ、ニホヒシダ等で、殊にエゾシモツケ、オホバスノキ等の小灌木を多量に産す。

檜保山々頂附近

山頂は略南北に延びて居る山稜で、全くハヒマツに被はれて居る。特に山頂西斜面は全部廣大なハヒマツ帯で、ハヒマツの外ガンカウラン、マルバシモツケ、オホバスノキ、カラフトイソツ、ジ、ホソバイソツ、ジ、キバナシヤクナゲ、コケモ、ミヤマハンノキ、ミヤマナ、カマド等の灌木又は矮生のもの、更にゴゼンタチバナ、コガネイチゴ、ミツバワウレン、マヒヅルサウ等を産す。又、ハヒマツ帯中の所々に裸出して居る岩石上にはエゾツ、ジ、キバナシヤクナゲ、コケモ、ガンカウラン、イハブクロ、チシマギキヤウ、カラフトヒナギキヤウ等のよく生育して居るのを見た。

自分は昨夏三週間、本年は一ヶ月間、南樺太東海岸の突岨山—登帆山—檜保山—知取山を非常な興味を持って歩く事が出来た。此等の山々は皆高度一〇〇〇米を越えて居ないらしい(未測量の爲め詳細不明)又北海道の大雪山其他の高山で見られる様な廣大なお花畑の美観は見られない、が然し突兀たる岩山、赤肌の頂、其の岩壁を飾つて居る美麗な植物等を存分眺め得て、云ふに言はれぬ男性的な氣分に浸る事が出来た。岩間ヌブリボツメクサ、シコタンサウの白花、山稜をロープだよりに岩から岩へ傳つて行くとき岩蔭で見たミヤマムラサキの紫花、カラフトミセバヤの美花等、今尙、樺太旅行を思出す度に最初に浮んで来る美しい印象の一つである。(平塚)

附言 此度の採集品は全部北大農學部博物學教室で、目下長兄館脇操氏が此等を専門的に調査されて居る事は非常なよろこびである。

憶ひ出深かりしヒユツテンレーベン (四)

ホルメンコーレン五十籽大長距離競走

廣 田 戸 七 郎

二月廿九日 ヒユツテ第五日目

早くは床に入つたが待たるゝだけに前夜は何となく短かつた。愈々今日がホルメンコーレンの五十籽大長距離競走の日だ。

ヒユツテに居たノールウエーの連中はもうスタートの場所へ出掛けた様だ。フィンランドの連中は監督初め用意でない様に仕度にかゝつて居た。

私達一行も今日は早々に起きて仕度を整へた。午前八時には皆がヒユツテを出發することが出来た。相變らず天候は良い。全く申分ないレース日である。

今日のスタートの場所はヒユツテから五籽餘りあるノールウエースキークラブのスキー博物館の前であつた。私達

が博物館前に到着した時には、場内は規律よく整理されて三個所にノールウエー、フィンランド、日本の國旗が立てられて靜かな風に揺らぎを見せて居た。日章旗は何年前に作られたものか知らないが、燦ぶけた色をして居た。けれど奥ゆかしい氣がした。同時に頭に母國がすぐ浮んで來た。そしてあの旗の影で應援し、期待して居る母國の人達のことを思はずには居れなかつた。何時も乍ら私の胸は日章旗を見る度に血潮の高鳴りを感じるのであつた。殊に外國に居る時このことが泌々感ぜられる。

入 場 料 問 題

スキー博物館の入口の門の處に近衛兵が二人立つて居て

入場券を調べて居る。門から博物館の方に向つて兩側に開いて繩を張つてある。その空間の中央邊からスタートをしてゴールインする場所が作つてある。金を出してスタートに特に近づいて見たり、ゴールインを見物する人の爲に繩の張つてある譯が判つた。勿論繩の外からもスタートやゴールインは見物が出来るが、さういふ場所でも、入場料を拂つて競技を見物するのが當然の一般の人から考へられて居るだけ、なか／＼、競技に對して理解があると思つて私達は感心した。東京邊では入場料を取らぬ競技會は近頃では返つて見物人が少いと聞いて居るけれど、多くの入場者が競技を理解して來たのであらうと思ふ。若しも入場収入を不純な方面に費つたりするならば入場料をとることは非常に問題であらうけれど、當然の支出に當てる爲なら決して入場料をとることは不穩當ではないと思つた。凡そ立派な競技會を開催する爲には、競技場の設備を完全にすることが必要となる。さうして設備を完全にすれば之を維持して行く爲に維持費を作る必要が生じて來る。當然の既決として入場料をとることになると思ふ。又一方どんな競技でもさうであらうが競技者だつて、競技を見物する人だつ

て完備した競技場で競技をし、又完備した競技場で競技を見て不愉快であつたり不満であつたりすることは微塵もない筈である。つまり愉快に純真な競技を見物することに凡てを包含して考へて、入場料問題はスポーツに當然附き物となつて來ると解釋して見たいと私は思ふのである。

さういふ様なことをひよつと頭に浮べて門をくぐると場内には數人の大會役員が圓いバッヂの様なホルメンコーレンデー一九二八の文字の入つた徽章を胸につけて、私達の挨拶に心良き笑を浮べて私達を歓迎してくれた。

門から入つて半町程で博物館の石の階段の處へ行く。階段の一方の方にラウドスピーカーが備へつけてあつた。タムキを上つてから左の方の壁に張つてあつた今日のコース圖を眺めて之をスケッチして居ると、オスローのアフテンポステン紙の漫畫子がやつて來て、僕達の似顔を書いて行つた。

世界一のスキー博物館

此處で一才博物館の中の模様を書かう。

博物館は日本式に云ふと三階建ての建て物である。

三階が會議室、二階が陳列室、一階が半分地下室見たいの感がする。

陳列室には此建物の建設に功勞のあつた人や、代々のノールウエースキー倶樂部の會長の寫眞、それからホルメンコーレンの複合競技優勝者即ち皇帝カップの受賞者の大寫眞、毎年のホルメンコーレン五〇軒競走のプロファイルや、ノールウエーにある三百餘のスキー團の名前、それからノールウエーに於けるスキート及スキー用具の變遷を語る時代物續いて各國の製作にかゝるスキー及用具等がズラリと並んで居る。別室にはナンゼンが北極探險に使用した天幕や品物が陳列してある。

一階は周りを石で圍んであるだけに窓はあるけれど暖い。脱衣室と、醫師の診療室と、食事を給する部室と、沐浴室便所等が設けられて居た。

總じて設備の至れり盡せりのものである。歴史が古いだけに私達も非常に興味を以て見物することが出來た。ノールウエーのクラブの會長さんに言はずと世界で唯一の歴史的スキー館であると言つて居た。

日本邊りでもかうした種類の博物館がもう何處かで出來

かゝつても良いと思ふ。高田方面か札幌方面でこの位のものが出來ても良いと私は思ふ。日本スキーもどうやら年代を指折る位に成長して來つゝあるのであるから。

九時過ぎ頃から百七十名ばかりの今日の選手が博物館へやつて來た。そして出發前の身体檢定を階下の指定の場所で順々に受けて居た。脱衣場には下足番があつて、所持品を預つて札を渡して居た。下足係りも兵隊さんがやつて居る。脱衣所の離れの部屋で多勢の選手が盛んにワックスを塗つて居る。全くその光景は戦場の様だ。各自夫々自分の經驗の蘊蓄を傾けてやつて居る譯である。

博物館の外でも盛んにワックスを塗つて居る。館外にオストビーの廣告が出て居た。「今日のレースはミックスが最適」と言つた風な宣傳をやつて居た様であつた。

今日の五十軒はオリムピア級と留守軍との競走である處に外來選手としてフィンランド、日本が加はつて居る。そこに一層の興味があつた。オリムピア連中はオリムピックに出掛けた時の例の揃へのダブルボタンの上衣にニツカボツカの服装で、ヘツゲが來る、キエールボトンが來る。レイン、ストアなどの顔が出揃つた。しきりに新聞の漫畫子

は今日の一着と目せらるゝ連中をとらへて似顔の筆を走らせて居る。ラツバライネンとその一統のフィンランドの連中も畫中の人になつて居た。

第一番の出發時間が近づく頃、ラウドスピーカーが鳴り出す。會長の挨拶に次いでオーケストラの音が聞えて來た。場内は次第に落ついて來た。丁度其頃小高さんと小島さんが揃つてやつて來られた。昨晚オスローへ着いたとの話だ。競技に出ない唯一の應援役をつとめて居た私には全く二人の方が今日の競技に間に合つて下さつたことを心から感謝した。早速私は二人の方をヤバニツシエ・ブレッツと入口の係りに紹介した。係は心良く入場を許可してくれた。午前十時一分前に第一番はスタートに立つた。三〇秒、十五秒、十秒、五秒、出發と合圖して正午前十時三〇秒第一番のスタートナンバーをつけた。Jens Johannessen は觀衆のハイヤー／＼に送られて元氣よくスタートを切つた。次の選手は三〇秒隔てて十時一分出發した。つまり今日のスタートは三〇秒隔であつた譯である。

私達の仲間の連中のスタート順位は次の様であつた。

29 高橋君 52 竹節君 74 永田君 78 矢澤君

第一區となつて居る Fiskelite の順位は大體次の様であつた。

Fiskelite (12.5 K.M. from Start)		秒	出發番號
(1)	Lappalainen (Fnl)	45 20	(131)
(2)	Knuttila "	45 30	(39)
(3)	Mattila "	46 30	(110)
(3)	Ole Hegge (Norway)	46 30	(25)
(5)	H. Haakonsen "	47 —	(24)
(6)	Kjelbotn "	47 20	(132)
(7)	Ole Stenen "	47 40	(109)
(8)	Oscar Aas [Haugen] "	48 30	(30)
(9)	John Røen "	48 50	(117)
(10)	Bergelagen "	49 00	(58)
(14)	Peder Belgum "	50 00	(12)
(?)	永 H (H)	55 07	(74)
第二區 Finnerud (25 K. M. from Start.)			
(1)	Lappalainen (F)	1 34 45	
(2)	Knuttila	1 35 50	
(3)	Ole Hegge	1 38 00	
(4)	Haakonsen	1 38 30	
(5)	Kjelholm	1 38 50	
(6)	Rustastuen	1 40 00 (No. 38 Start)	
(7)	Lars Lördahl	1 40 40 (No. 154)	
(8)	John Roen	1 42 45	
(9)	Peder Belgum	1 43 00	



ル　ー　ド

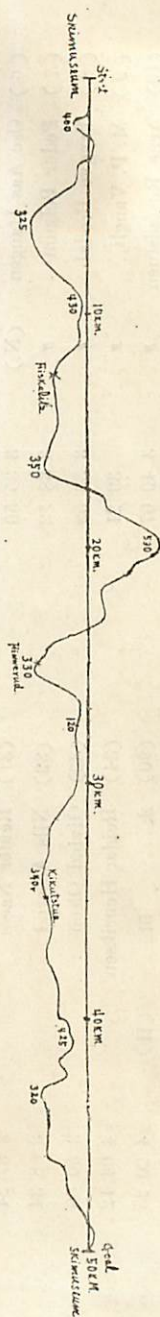


ケルボートン

リス・リガート

(10)	Skagenæs		1 43 10 (No.142)	(13)	Ole Hegge	"	3 43 26
(12)	Mattila	(F.)	1 44 00	(14)	Bernt Bergehagen	"	3 44 14
(13)	Bergehagen		1 44 15	(15)	Trygve Iversen	"	3 44 25
第3組 Kikutna (ca. 35 K. M. from Start)				(16)	Ole Bergundhaugen	"	3 45 08
(1)	Lappalainen		2 15 —	(17)	Martin Gausen	"	3 45 11
(2)	Horde		2 21 30	(18)	An. Tollefsen	"	3 46 35
(3)	Hegge		2 21 50	(19)	Arthur Støa	"	3 47 16
(4)	Haakosen		2 22 —	(20)	Georg Blyverket	"	3 48 50
(5)	Knuttila		2 23 30	(21)	S. Vestad	"	3 49 12
(6)	Ingelstrid		2 25 40	(22)	Nic. Fuhre	"	3 49 32
結果はノールウェーの旗色悪しく、遂にポイントメントのラ				(23)	Reidar Lund	"	3 50 25
ンズライネンが一着であった。入賞者				(24)	Knut Strömstad		3 50 53
(1)	Matti Lappalainen	(F.)	3 25 38	(25)	Einar Bøleren		3 53 06
(2)	Kristian Horde	(N.)	3 27 23	(26)	Einarde L. hein		3 54 04
(3)	Hagb. Haakosen	"	3 30 22	(27)	Oscar Larsen		3 55 09
(4)	Hans Ingelstrud	"	3 43 52	(28)	Helge Rasmussen		3 55 51
(5)	Knuttila	(F.)	3 35 47	(29)	Olaf Branten		3 56 18
(6)	Osc Aas Haugen	(N.)	3 35 59	(30)	Albert Koch		3 56 39
(7)	Peder Belgum	"	3 38 53	(31)	Reider Naess		3 57 24
(8)	Trygve Brodal	"	3 38 59	(32)	Nils Aaserud		3 58 34
(9)	M. P. Vangli	"	3 39 21	(33)	Oivind Olsen		3 50 09
(10)	Arne Rustadstuen	"	3 40 07	(34)	Reidar Henriksen		4 04 12
(11)	Sv. Kennerd	"	3 42 17	(30)	永 川	(H)	4 20 25
(12)	Gjern. Munnsen	"	3 43 17	(121)	竹 節	(H)	4 54 03
				(124)	高 橋	(H)	5 05 33

50 K. M. 経 断 面



矢澤君は相当タイムも良く有望であつたが、途中でスキ

ーを折つて遺憾乍ら棄権したことは大へん残念であつた。

今日の五〇軒では僕達仲間、サンモリッツの時以上に疲勞してゴールへ入つて來た。コースがサン・モリッツの時とは比較にならぬ位スキーの技術が成績に關係する様なコースであつたので随分皆が疲れたらしかつた。全くコンナに冷い人間に脈が未だあるのかなあと思はれる位冷えて居た。今日の競技で又もジャバン／＼の聲が彼處此處に湧き出て私達の耳底を突いた。

今夜は座談會の續きをケリつけねばならないので、高さんの申出で、オスローに降りて例のホテル・サボイに泊ることにした。

宿へ着いた時竹節君などは股の筋肉が輕撃を起すと言つ

て居たので盛んにマッサージをしてやつた。

雜 感

今日使用したノールウエー、フィンランド選手達のスキービングはベルゲンダールが大部分、中には新らしいウィッツピングを使つて居たものもあつた。スキーはフィンランドの連中が權でノールウエーの連中がアマリカンヒツコリーの様であつた。何れも日本の連中の穿いたスキーよりは重味もあり長くもある。

服装は殆んど全部ニツカボツカ型のズボンを書いて居たステイルンバンドをつけて走つた連中も相當居たけれど歸る途中で暑くなつて大抵とつて來た様であつた。

途中々々の成績を見ると概して五〇軒レースでは、四〇

矜以後の奮闘如何で勝敗に可成りの變化が生ずる様である
だから四〇矜頃の成績でゴールインの成績が大方は想像さ
れても、どうして／＼それからガラリと變化することが多
い様である。

ラッバライネンが一着であつたことは、1913以來初めて
のことで、ラッバライネンがゴールへ入るや否や監督は意
氣揚々とラッバライネンを連れて休憩室へ入つて行つた。
其道路上で、新聞社の寫眞班が彼を包圍して寫眞をとる。

ラッバライネンは元氣な顔が又となき得意を見せて山出し
の様な顔に笑を浮べて居た。

フィンランド人の得意に引きかへて、ノールウエー人は
ガンモドキを他處から來た狐にさらわれた様に何れもガッ
カリした様な顔をして居た。

然しスポーツに理解があると云ふか、彼等は決して他國
人が優勝して自分達の國の選手が負けたからと云つて他國
の優勝選手を卑下する様な態度はとらない。皆今日のラッ
バライネンの奮闘を激稱して居た。

コースが殆んど森林の間を通じて居るだけに雪質は申分
なく良いが、百何十人が滑る二本のコースは爲に随分切れ

込んで居て固められて居た様だ。そしてコース中にはサン
モリツツの時の様に危険といふ様な降りはないけれど狭い
處もあつて、滑降の技術を要する處が少くなかつた様であ
る。

中山峠 ヒユツテ

北海道山岳會にて今夏以來建設中の中山峠ヒユツテは此程竣功
した。

同ヒユツテの構造、設備等は大体手稻バラダイスヒユツテにな
らひ優に四十人は收容し得る。

ヒユツテの位地は陸地測量部の五万分の一の圖上にて定山溪の
部の中山驛より札幌街道を黒橋方面へ約二十丁下ると橋梁があ
る。その橋梁より西へ約二百間下る澤の中で水の豊富にある絶好
の場所である。

附近の喜茂別嶽、無意根尻、並河ヌブリ等の登攀もこのヒユツ
テの利用により容易に出来る様になつた。

又中山峠附近の一大スキー郷の愉快味を思ふがまゝに味ひ得る
様になり、多年のスキー家の宿望の的も此處に達し得られる様になつた。

ロツグケビン及びカツテーヂ

其の建築法、造作、飾付及び家具の造方（承前）

伊 藤 虎 夫 譯

枠縁 (Frames) — 扉枠及び窓枠は通常厚さ一寸にて片面を匏を掛けた板を以つて造られ、框を適當の所に保つやうに釘付にした戸當りを附す。窓闔まじりは外方に、而して下向

きに傾けてあらねばならぬ。夫れは下方の丸太の上に張出されねば雨水は建物の側面をつたはり流れるであらう。

窓 — 窓は各種の様式にて造られ得る。框には引戸窓、上げ窓或は内開き窓、観音開き窓等である。様式は何れにせよ暴風に耐ゆるだけの装置を豫めなす可きである。内開き窓はなる可く避け採用せざる方善し。

框 — 框は既製品を使用し、既にペンキを塗られ亦硝子を嵌められたる物を處理すれば善いだけにするのである。

框の厚さは一寸五分位あれば充分である。運搬の際硝子の破損を防ぐ爲に條板等にて框を覆ひ荷造する。

蟲除け金網あぶら — 窓及び戸口を充分覆ふ枠を造り、虫除けの極く細かい金網を張る。戸口の方は通常の扉の如く挿錠及び蝶交を取付ける。是等の枠は厚さ一寸巾三寸位の小割板にて造り、四隅は枠組み或は嵌込みにて作る。尙ほ四隅には正三角形の小木片を釘付にて枠の保強とす。そは頼杖の代りとなりゆがみを防ぎ枠を正しく保持する。この枠に蚊網を出來得る限り緊く張り、ゆるみの出ぬ様平紙にて打付け小割又は棧にて網の端を釘付にせねば耐久的ではないであらう。

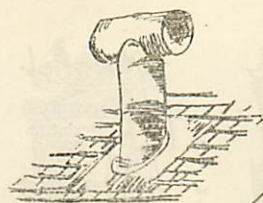


Fig. 22

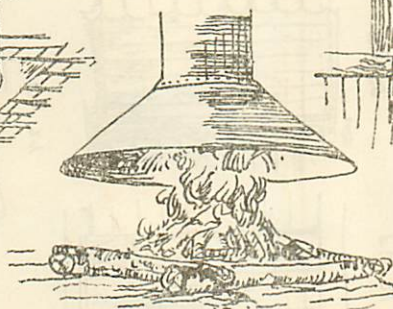


Fig. 23

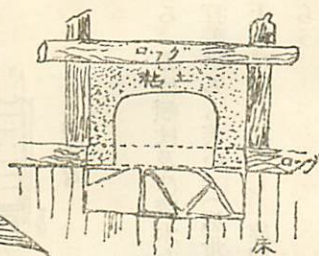


Fig. 28

窓の蝶番及び
 締り——古靴の
 用皮の如き皮革
 の強靱なる一片
 は窓の好蝶番と
 して役立であら
 う。然し鐵製蝶
 番は無論善いに
 違ひない。かゝ
 る蝶番にて取付
 けらるゝ開き窓
 には適當なる角
 度にて開放せし
 め置く爲に一個
 の硬材製の棧を
 附し置かねばな
 らぬ。(廿七圖)

にて框の下端に蝶番にて取付けらる。棧の他端には縦列に
 穴を明け窓敷に横列に打並べた釘に適當に嵌め、以つて硝
 子戸の開きの多少を任意にする事が出来る。止金物及びつ
 ほ釘或ひは皮釘は框を閉鎖するに必要である。通常の滑り
 框は單に凸張りさへあれば充分である。然し上下に滑べる
 框の時は各種の位置に其れを開放し置く爲に一個にては足
 りぬのであらう。

遮戸——各々の窓框にはキャンピング・シーズン終つて
 立去る場合、建物の戸締りを嚴重にする爲に取外遮戸を造
 らねばならぬ。是等の遮戸は箱差板にて造り横棧を釘付に
 す。棧或ひは横棧の角を取去れば、ピツタリと合ふであら
 う。この遮戸の兩端の棧より長い長いボルトを挿入し、窓
 框を通じて小屋の内側にて遮戸門にてナット及び座鐵或ひ
 は蝶々型止め螺旋を以つて締付け、遮戸を窓框に緊し戸締
 りすべきである。此の遮戸門は堅固なる横木にて、最も狭
 き方に渡されねばならぬ。

扉——小屋の扉は(廿九圖)適當なる幅の貫打にて造ら
 る可く、頂部、中部及び下部はよく筋違を以つてゆがみを
 防ぎ置かねばならぬ。凡て各片は頭を潰したる釘にて打着

ける。亦は頬杖及び横木を持つて角材製の枠の外側を柿板を打着けるも善い。(第卅圖) 扉の蝶番を附する側の用材を上下に長く延ばし、旋回軸柱となし開閉する事も善いであらう。

扉蝶番——善き鍊鐵製蝶番は手に入れる事の出来る最上

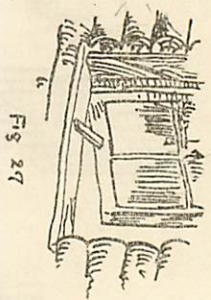


Fig. 27

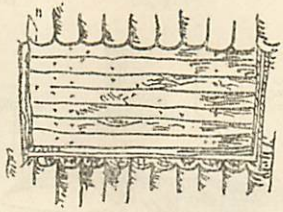


Fig. 29

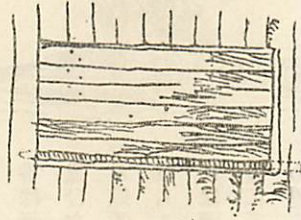


Fig. 31

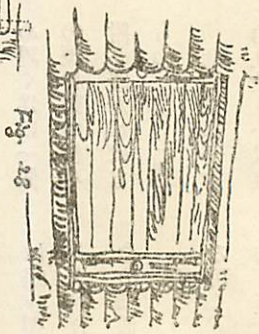


Fig. 28

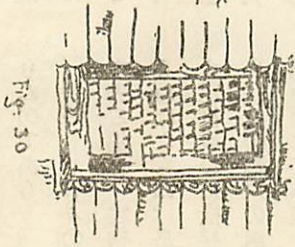
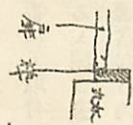


Fig. 30

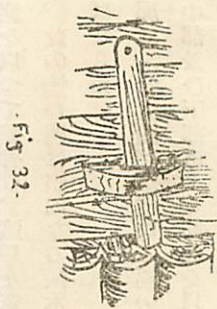


Fig. 32

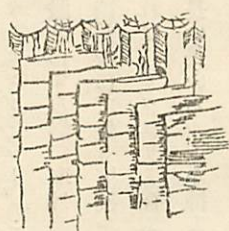


Fig. 34

の物である。然し斯かる物を得られざる場合には扉の端の頂部より底部に旋回軸棒を打付ける(卅一圖) 床上には軸受の穴を設け、頂部の軸端は戸口の丸太に適合する穴を急ぐり挿込む可し。底部の軸受は丸太若しくは床下に支持を設く可し。頂部の穴は相等深く急ぐられてある可く、旋回

軸を持ち挿込み而して底部の軸受に滑込ませる
 旋回軸柱は豫め型をとりのひ油を塗り、然る後に
 扉の端に定着せしむるのである。

戸締り——戸締りは通常鐵製かひがね鑿くわと同様に木材
 にて造らる(卅二圖)横木は約二寸厚さ一寸、而
 して長さ約一尺五寸あらねばならぬ。樞軸の末端
 はボルトに締めらる。護材は堅牢で而して長孔を
 穿たれ、横木(門)を掛けたり又は引掛より取外
 すに充分樂に動く餘地あらねばならぬ。引掛けは
 厚さ七分五厘位、又引掛には傾斜を作り横木が凹
 部に滑込むやうになす。護材或ひは導桿は横木が
 長孔の底部に停止されてある場合、横木の下面と
 ピツタリ接觸せねばならぬ。横木の端に結びたる
 皮紐或ひは生皮の紐を鑿の上方や、離れたる所の
 穴を通じて外側に垂下す。これを引きて鑿を外し
 扉を開放し得る様になす。この皮紐の末端に木切
 れを結び付け置く、これにて鑿は完成す。

横皮よこかわを填める事——小屋を暴風に完全に耐へし
 むる爲に丸太間の隙を横皮よこかわに填充せねばならぬ。



Fig. 36.

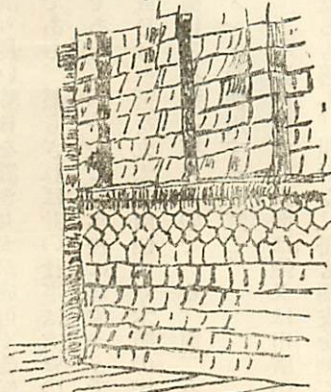


Fig. 37

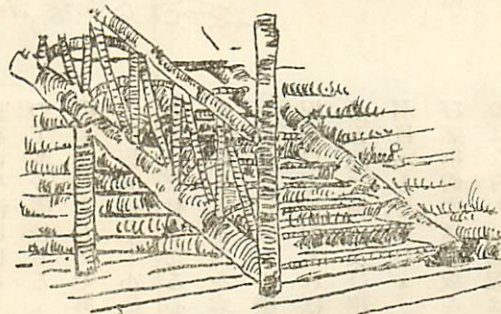


Fig. 38.

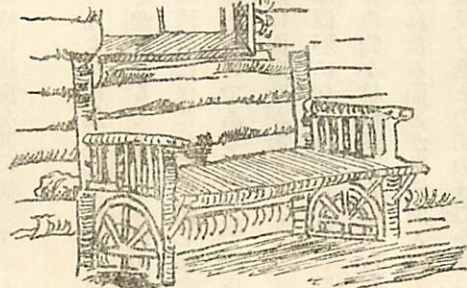
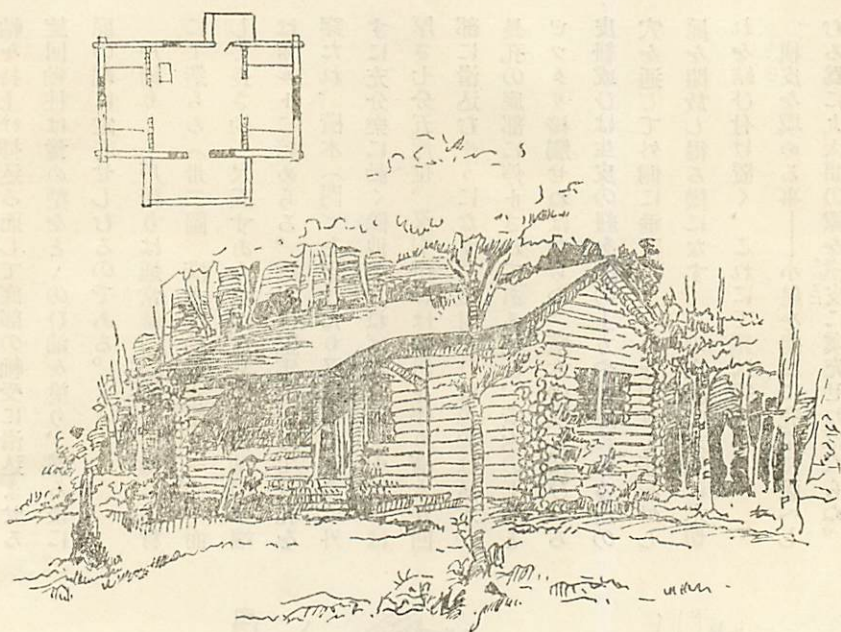


Fig. 39



然し出来得る限り長い時日を置き丸太が成可く乾燥するを待つて成すのである。然らざれば此の仕事は次ぎの季節には再び繰返すであらう。一般に一年後になすやうである。填充物は槓皮或ひは蘚苔を丸太の兩側より木製の楔型鑿を以つて當て、槌にて打込み填めるのである。前二者の填充物の代用にセメントを使用するも宜し。

内部の仕事——小屋内側の丸太面は鉋ちまき又は巾廣の斧にて垂直に平滑に砍るも善し。粗野な見掛も樹皮を剥ぐ事に依つて多少柔けらるゝと同時に樹皮を其の儘遺す事も一層野趣満々たるものである。

壁板其他——小屋内の丸太を箱差及び玉縁張を以つて覆ふ事は落付きたる心持を起させるであらう。此の仕上は清楚で而して室内を容易に清潔に保たれる。然し都會の空氣を多分に匂はせる嫌ひがあるのである。夫れ故、樹皮及び柿板を以て被覆すれば遙かに面白味があるであらう。(卅四、卅五圖) 柿板及び樹皮は同形に切られ而して善き壁板(腰羽目)とせらるゝ。若し内側を柿板張りとなすなれば扉及び窓框の面は柿板を張られたる面とが見透面となる如くせねばならぬ。柿板は丸太及び框との間の仕口しぐちを覆ひ、それ

と同高に張られねばならぬ。(卅六圖)

圍壁は幅二寸五分位に鋸かれたる背板にて或ひは小さな苗木を平滑にして造り釘付にする。或る腰羽目は上記の如く柿板或ひは樹皮にて造る事を得るも、然し床より六尺の高さにて行儀よく張らねばならぬ。而して背板又は通常の板にて一つの柵を形造るやうな頂蓋をせらるゝ。(卅七圖) 其の下部には線形として丸棒或ひは背板の一片を差込み置かれねばならぬ。

階段——堅牢なる木材の支柱を造り、而して枠組し夫れに踏板を嵌込む。親柱は原材より造られ而して欄干も自然木にて造る。手摺子も亦素材にて造らるゝのである。親柱たる木材は天井及び障壁迄達するやう造られ、これ又素朴なる仕上を形造るであらふ。(第卅八圖) これが爲には階段下には三角型の空所が出来る譯である。天井の上部(二階の登口)及び階段の外側の親柱には樹皮を以つて組格子或ひは幾何學的模様にて欄干等を造る。

窓邊腰掛——こは良き硬材の枠組を建物に取付け自然木の腕木或ひは曲木にて支持せらる。座席は細い直徑約一寸の眞直の枝を押並べて居る。(卅九圖) 是等の腰掛を居心

地善くするにはふつくらとした座蒲團即ち常磐木の細枝、白樺の樹皮、鮑屑或ひは乾草を詰めた厚地のキャンバス製のクシヨンを必要とする。

勿論外觀は熊、鹿或ひは他の毛皮にて覆はるゝことに依つて大いに立派になるであらふ。

— 續く —



雑 録

日本に招聘されんとする ノールウェイスキー選手

技師(専門家)

Norges Ski Verband の Vorstand

Kaptein N. R. Ostegaard 氏に選任して貰ふことにした。

Kombiniert の選手

1. Sverre Lislegaard 25才 所属 B. U. L. Oslo
2. Kristian Johanson 20才 〃 Heming. V. Aker
3. Johan Grøttumsbraaten 28才 〃 B. U. L. Oslo

履 歴

1. Sverre Lislegaard

(古い Aar Bok を調査して見て下さい。)

Norway の一流、蓋し世界的選手にして昨冬はノールウェースキークラブより推薦されて、イタリアスキクラブの Trainer として、イタリアに赴き約二ヶ月イタリア選手に Training を爲す。

日本オリンピック選手も亦滞歐中氏のコーチを受け非常に親しみあり。煙草酒一滴も喫せず。語學としては母國語外

ドイツ語に巧みなり。

2. Kristian Johansson

オリンピック選手としてサン・モリッツのオリンピック競技に派遣 1928年 Holmenkollen 複合競技に出場第六位入賞 Sprung, langlauf 共に優秀なる技能を有す。

語學母國語外ドイツ語に巧みなり。

3. Johan Grøttumsbraaten

シヤムニイ、サンモリッツのオリンピック競技に於て優勝して居ることは周知。尙1928年の Holmenkollen 複合競技に於て皇帝カップを得たり。

語學は母國語外何も知らない。

Sprung Allein

1. Sigmund Rund. 20歳 Kongsberg idr. for.

世界レコード 72.5m 保持

尙サンモリッツのオリンピック競技で 62.5m 飛んで第二位を得たり。

1927年 Holmenkollen 競技會で Junge Klasse の Sprung の第一位。

語學 母國語外ドイツ語を話す。

2. Jacob Tullin Thams. 28歳 Ready. Oslo.

世界的に有名な Springer

語學 母國語外英語少し話す。

ス キ ー 年 鑑

(1927—1928)

今年の年鑑は國際オリムピックススキー大會第一回日本選手派遣記念號として發刊することに致しました。従つて内容はオリムピックス選手の報告及感想等を第一として、次いで可及的豊富にオリムピックス土産の寫眞を挿入することにしました。他に本年度代表委員會に附議せる決定事項、規約、規定の改正等編入して居ります。

大きさは昨年通り菊版假製綴としました。

發行豫定日は十一月下旬であります。

定價は實價で金一圓であります。

申込みは各加盟スキー團體で纏めて聯盟本部に申込んで頂ければ甚だ好都合であります。又個人的に直接聯盟本部に申込んで下されても宜しうござります。

全 日 本 ス キ ー 聯 盟

東京市橋區宗十郎一丁目

岡村源太郎遺稿集

スキーデイズタンスレース

完 成
限定五〇〇部

体 裁

菊版 三三〇頁 假製綴

紙 質

上質紙 寫真版六葉

實 價

金 貳 圓

發 兌

札幌 山とスキーの會

小樽 梅屋運動具店

御申込は甚だ勝手ですが成るべく小樽稲穂町梅屋運動具店宛にお願い申します。

山とスキーの會



SKI HEIL

スキ一

ト

其用與全般

中野商店

スキ一印及

第一 斯
產 製 大 量

札幌



GET SUPERFINE SKEES.
AND MAKE AN
EXCELLENT
RECORD!

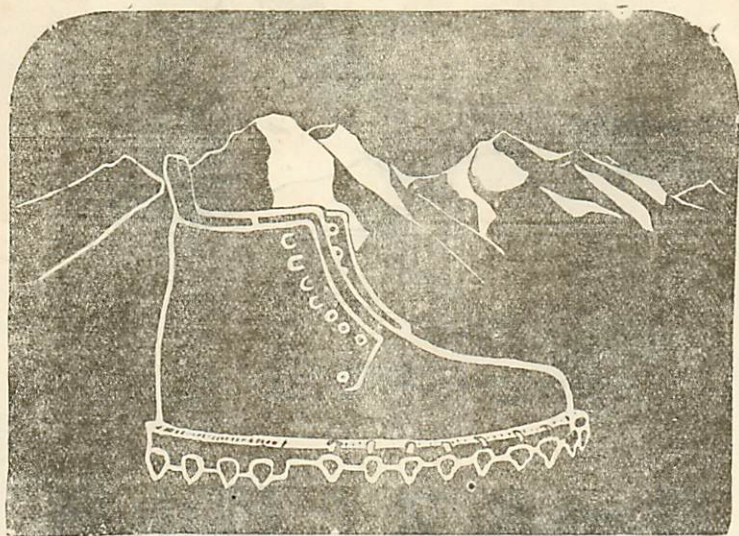


優秀ナルスキー用其具

樽 小

梅屋運動具店

テ於ニ會覽博藝工産畜回二第
領受牌金賞等一



靴一キスと靴山登

.....

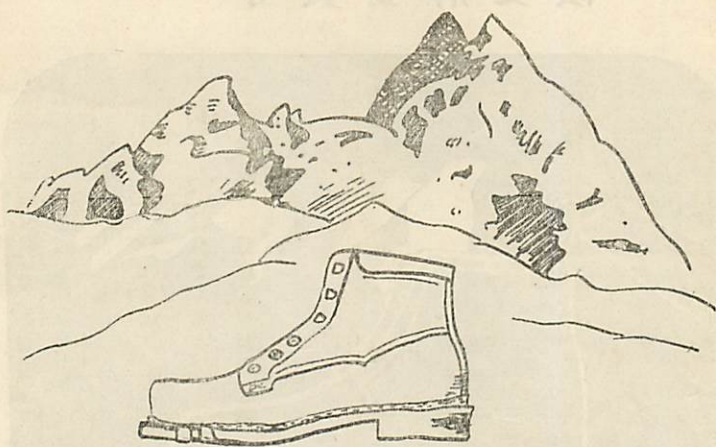
角目丁四區郷本市京東

店靴屋田太

番二一七四小話電

番七二一六京東替振

北海帝國大學キス靴部及同山岳部御用



登山靴とキス靴

各種

札幌市南一條十街

木本靴店

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことを願ひます、又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、O・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六册分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送ります。次の御送金

あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は

頂きます。

昭和三年十一月廿八日印刷
昭和三年十二月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 小 川 玄 一

印刷兼 發行者 小 川 玄 一

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西十五丁目

發行所 山とスキーの會

振替小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Clubo

No. 88. Desembro 1928. Sapporo, Japanujo.

美満津特製ウインタースポーツ

各種用具

飛躍・競走及び

山スキー

競走用ポップスレー

雪橇・雪靴

アイゼン・ピッケル

其他

美満津の

Toe-iron の曲げ方は
——確實なる事で有名なり

アイススケート新荷着



合 名 會 社

美 満 津 商 店

東京・本郷・赤門前
デンワ【小石川】 845, 2071

大正十三年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和三年十一月二十八日印刷納本
昭和三年十二月一日發行

山とスキー

第八十八號

定價金參拾錢